

多数歯埋伏及び下顎第二小臼歯の先天性欠如を有するクレチン病患儿の1例

○古澤 潤一¹⁾、森下 格²⁾

- 1) 古澤こども歯科クリニック、
- 2) 雪の聖母会聖マリア病院・矯正歯科

【目的】クレチン病は先天性の甲状腺機能低下症で、小児の成育に必要な甲状腺ホルモンの不足から発育障害や知的障害が問題となる疾患である。歯科的には萌出遅延や多数歯埋伏の原因となることが指摘されている。今回本症と診断された11歳男児の症例に遭遇した。児は新生児期よりホルモン補充治療を継続的に受けてきたため、医学的には健常と判断されているものの、歯科的には多数歯埋伏及び先天性欠如を有している。初診から4年間の咬合誘導治療の経過を報告する。

【症例】

患児：初診時年齢11歳5ヶ月 男児

主訴：生え変わりが遅い 上顎前歯の離開

家族歴：特記事項なし

既往歴：新生児スクリーニング検査を経て生後30日目より福岡市立こども病院・感染症センターに通院、甲状腺ホルモン剤（チラーゼンS）を服用している。現病歴：ウ蝕治療のため近医を受診。乳歯の交換が遅いことに母親が疑問を持ち当院を受診した。現症：全身所見；身長146cm、体重41kg（ともに+1SD内）口腔内所見；現在歯は上顎 EDC21 1 BCDE 下顎 6 EC21 12CDE 6

パノラマエックス線写真所見；多数歯の埋伏、下顎犬歯の含菌性嚢胞、下顎第二小臼歯の先天性欠如を認めた。

頭部エックス線規格写真所見；SNA85° SNB79.5° ANB5.5° FMA39° 骨格性Ⅰ級 ハイアングル傾向を示していた。

【経過】九州中央病院口腔外科にCT検査及び下顎犬歯の嚢胞開窓術を依頼し、その後リングルアーチで同歯の牽引を開始、並行して上顎4前歯のアライニングを行った。4年経過の15歳時点でも上顎小臼歯および上下顎犬歯、第二大臼歯は埋伏しており、骨格性Ⅲ級、ハイアングル傾向が顕著になったため、咬合誘導は高次医療機関である聖マリア病院矯正歯科へ継続管理を依頼した。

【考察】患児の口腔内に見られた多数歯埋伏は、クレチン病との関連が疑われた。今後、歯科管理においては小児科や矯正歯科、口腔外科など臨床他科との連携がより重要と考えられた。

初診時における受診中断者の実態調査と対応について

○楠田 理奈、岩男 好恵、柏木 伸一郎

【緒言】近年、少子化が進むに従い小児を取り巻く環境や、口腔内の状況が著しく変化している。これらの変化を反映して、小児歯科に来院する患児の多くは、必要な処置を終了した後も歯科疾患の予防と口腔の健康維持を目的に、定期健診に移行している。しかし、その一方で治療途中にもかかわらず、受診を中断する者も少なくない。そこで今回、当院の定期健診受診率をより高めるため、初診患者の実態を調査した。また、今後の対応を検討するため、問診票の改善や保護者へのアンケート調査を実施したので報告する。

【対象及び方法】平成19年1月から平成20年12月までの2年間、当院に来院した初診患者541名を調査対象とした。必要な処置終了後、定期健診に移行した群478名、処置を中断した群63名に分類し、問診票及び診療録を基にして両群の比較分析を行った。

その結果、「主訴」および「診療に対する要望」などの項目で両群に差が認められた。保護者のニーズを汲み取り、より効果的な説明を行うため、従来の問診票に「家庭での患児の様子」「保護者の歯科に対する意識」「抑制治療に対する保護者の希望」を問う項目を追加した。

また、保護者の理解度や不安な点を明確にすることを目的として、初診時のオリエンテーション終了後に、治療や予防に対しての考えや定期健診の希望などについて保護者にアンケートを実施した。

【結果及び考察】問診票の改善により、患児や保護者の生活環境や心情をより理解し診療に臨むことができた。特に抑制については、抑えないで処置してほしいという保護者が数名おり、その対処法を検討した上で対応することができた。診療後に行ったアンケートにおいては、当院の診療内容について保護者の考えを知ることができた。今後は更なるラポールの確立を目指すため、患者及び保護者の現状に対するより一層の理解や対応が必要であると考えられた。